

# 今、オープンソースをどう活用するべきか

## —オープンソースの活用における“攻め”と“守り”—



野村総合研究所 生産革新本部  
生産革新ソリューション開発二部 上級テクニカルエンジニア

たなか ゆたか  
田中 穰

専門はオープンソースソフトウェアに関する調査・コンサルティング

オープンソースソフトウェア（以下、オープンソース）は、企業システムの選択肢として当たり前のように候補に挙がるようになった。最近はその選択理由はコストダウンだけではなくなってきた。本稿では、最近のオープンソースの利用における“攻め”と“守り”について解説する。

### オープンソース利用動向の変化

オープンソースの特徴として、オープンソースライセンスの下、無償で利用でき、ソースコードを改変できるメリットがある一方で、商用ソフトウェアのようなベンダーサポートがない点がデメリットとして挙げられる。

企業システムにおいては、以前はサポートがないためにオープンソースの採用を控える企業も散見されたが、最近ではオープンソースのサポートサービスを提供するベンダーも登場し、また世界中で利用されているという実績から、積極的にオープンソースを採用する企業が増えてきている。そこには、オープンソースを使った“攻め”をどうするかという問題と、その際の“守り”をどう固めるかという問題の2つがあるといえる。

### “攻め”としての オープンソースの活用

まずは“攻め”について見ていこう。  
これまではコストダウンを目的としてオー

ペンソースが注目を集めていたが、最近では消費者や企業のニーズの変化に素早く対応するためにオープンソースを採用する企業が増えてきている。オープンソースのHadoopを例に取れば、Hadoopの登場によって超大量データの集計が高速で安価に実現できるようになり、採用する企業は迅速な経営判断ができるようになった。

これからのITはサービスとサービスがつながり、顧客に新しい価値を提供する時代になるだろうといわれている。実際にSNSのIDで、他のWebサービスも利用できるようになってきた。HTTPやHTMLという標準仕様が定められたことで、誰でも簡単にインターネットを利用可能になったように、サービスとサービスの連携にも共通ルールの策定、すなわち「標準化」が必要になる。企業が足並みを揃え、情報をオープンにして仕様を策定する。そして、その仕様をいち早く実装したオープンソースが誕生し、商用のソフトウェアやサービスがそれに追随していく。新しい技術を活用し、今までできなかったことをいち早く実現し、競合との差別化を図る

には先端オープンソースの活用が1つのポイントとなっていくだろう。

## オープンソースを利用する際の“守り”

一方で、オープンソースを使う際の“守り”についても変化が生じている。企業システムにおいては、長期安定利用することが重要である。オープンソースが本格的に採用されるようになってから10年余りがたち、サポート終了（EOL）を迎えるものも出てきている。EOL後に脆弱（ぜいじゃく）性が発見され、世間を騒がせたStruts問題は記憶に新しい。オープンソースを活用する上では、オープンソースのリスクも理解し、“守り”の対策も練らないと想定外の痛手を被ることになる。

一般的にソフトウェアの保守期限はハードウェアの償却に合わせて5年に設定されてきた。ソフトウェアベンダーは延長サポートを提供することもあるが、基本的には最新版にバージョンアップしてほしい。だが、利用する企業側としては安定稼動しているソフトウェアをバージョンアップするにはリスクが伴う。また新たな費用がかかるので、できればそのまま利用を継続したいケースも多い。

オープンソースは、基本的にベンダーロックインになることはない。もちろんオープンソースにアドオン開発したソースコードは、改修したベンダーでないと保守が難しいケースもあるだろう。だが、オープンソースはライセンスの有効期限に追われてバージョンアップを強要されることはない。オープンソースを扱うエンジニアを自社に確保する戦

略もあるが、オープンソースのサポートベンダーにアウトソーシングすることで安価な長期安定利用を目指す道もある。オープンソースの長期サポートはNRIの「最大15年サポート」をはじめとして各オープンソースベンダーが提供している。状況に応じた適切な選択をしていただきたい。

## 戦略に応じて適材適所なオープンソース活用を

オープンソースをどこでどう活用していくべきなのは、企業の業態と戦略による。NRIが提案する企業システムでも、商用のソフトウェアやサービスとの取捨選択を行っている。業務によって期待される特性とリスクに対する考え方が異なるからである。

オープンソースも企業システムを実現する手段の1つであり、商用の製品やサービスと同様にメリットとデメリットがある。いち早く革新的なオープンソースを活用して競合との差別化を図る分、初物リスクを冒すのも戦略である。またオープンソースでの長期運用を目指し、EOL後の脆弱性対応リスクをアウトソーシングするのもまた戦略である。このような戦略を決めるための目利き力と判断力は今まで以上に必要となってくるであろう。

NRIはベンダーフリーという立場を取っており、特定の製品だけに限定するのではなく、顧客の状況と戦略に基づいて最適だと思われるシステム構成を中立的な立場で提案している。NRIは今後も適材適所を見極める目利き力を持ち、オープンソースソリューションを提供していく予定である。 ■